

書写書道教育を考える会

講演『今なぜ書写教育か～書道教育への接続を考えながら～』

講師 小竹光夫先生

1995.12.09(土)

あれは11月初めのゼミでのこと…。小竹先生から「奈良旅行をしないか」というお誘い(?)をいただきました。もちろん即決定!! 私たちが乗らないはずはありません。旅行の幹事は藤原さんとのりちゃんということで、先生のお仕事に便乗して、(私たちの学年では)初のゼミ旅行が敢行されたのでした。参加者は、主役の小竹先生、卒業生の入鹿山先輩、院生の梅本さん・藤原さん、そして私たち学部3回生5人の面々と相成りました。

当日は、朝8時に大学の駐車場に全員集合、眠い目をこすりながら高速バスで大阪に出ました。難波から近鉄奈良線に揺られ…るために改札口を通ったところで、早速トラブル発生!なんと先輩が切符とはぐれてしまったのです。すぐに気が付き、駅員さんに説明して、代替切符(?)を発行してもらいました。一同ほっと一安心。それにしても、迷子の切符はいずこへ…。そこからは順調に電車で揺られて、奈良には昼前に到着。まずは講演場所の確認のため、ゾロゾロ歩いてならまちセンターを発見。場所さえわかればこっちのものよってことで、次はやっぱり「腹が減っては戦はできぬ」でしょう。商店街でトンカツ屋さんを見つけ、皆でおなかいっぱい、幸せいっぱい♥♥。

ならまちセンターに戻る道筋にて…。

S「何をしゃべろうかな…実はまだ決めてないじゃ」

K「でも、資料はあるんでしょう?」

S「あれはサービス。周りが破れて楽しいじゃろ」

K「絶対に、もらったら破れて言われる前に破る人いますよ。そしたらベリベリ音がするから、すぐバレますねっ」

誰と誰の会話かはさておき。このとき先生はすでに「ネタ」を仕入れられていたのです。しかも「つかみ」と「中身への接続」の2つも…!! 私たちはただ何気なく会話してただけだったのに。やはりここに物をどう見ているか、どうとらえているかの差が大きく出るのでしょうね。やっぱり偉大なのです。

さらに私たちは、先生のもっと偉大なお姿を、講演の中で再認識してしまうのでした。予想通り、席に着くなりあっちでもベリベリ、こっちでもベリベリ…の中、先生のオーラは次第に会場をしっかりと包み込み、参加者の目と耳を釘付けにされました。当然私

たちの目と耳と心も再び…。その場を再現することは私の文章力では到底無理ですが、記録として止めておきたいので、話の順にその概略を書き連ねておこうと思います。



世の中には、循環があり悪循環がある。その一例として、今朝ここに向かう途中、一緒にきたゼミ生の一人が、改札口で切符を取り損ねてしまったことが挙げられる。切符は改札口に取り残され、次に来た人は自分の目的地とは違う切符を手にして、電車に乗り込んでいく。その次の人もそのまた次も…。誰かが気付くまで続けられる悪循環の始まりである。現在の書写教育についても、このような悪循環は作用していないだろうか。

①手で机に自分の名前を書いてみて下さい。

②落花生の絵を描けますか。

この2つの要求から、果たして「罨」が感じられるだろうか。①は、みんな恐らく人差し指を使ってしまっているという罨である。我々は人差し指が文字を認識する指であることを無意識で知っていることになり、それは執筆法の基本を知っていることにもなる。②は、「落花生」という言葉の中に、日本の文化が凝縮されているという罨である。「落花生」は、「花が落ちて（地中で）生きる」という、植物の生きている「経過」からの命名である。対して「ピーナツ」は、「結果」としての「2つの豆」という意味である。これは、そのまま東洋と西洋の文化の違いであると換言できる。また、この文化の違いは、風呂敷と鞆を見てもよくわかる。中に入れる物によって柔軟に形の変化する風呂敷に対して、その大きさに中に入れられるものの大きさが限定される鞆。日常的に我々の身の回りにあるもので、東西の文化が語れるのである。

マンホールの蓋はなぜ丸い？

日常生活では目に留まることもないマンホール。そのマンホールの蓋が、いかに理路整然と合理的に設計されているかを、考えたことはあるだろうか。マンホールは深い。マンホールの蓋は毎日踏み付けられるに絶え得る頑強さと厚さ、重さを誇る。中に蓋が

落ちてしまうと、そう簡単に引き上げることはできないだろう。実は、円形であるがために直径よりも長い部分は存在せず、したがって下に落ちるということがない。当たり前のように眺めるものの形態に、これほどまでに明確な理由が存在していたのである。

セリカとMRⅡ、どちらが速い？

答えはMRⅡ。しかし、乗せているエンジンは同じ物である。ただ、MRⅡはハンドルが車の重心の位置にある。そのために、カーブでも車がふらつかずに回れるのである。セリカは前のほうが重く、MRⅡほどカーブなどに強くないのである。

…一見書写や書道と何の関係もないように思えるこれらの話。ところが、例えばこの重心の話を、筆の持ち方に置き換えて考えてみるとどうだろう。問題はそこから一気に書写のほうに引き寄せられる。しかも日常的な話題からの転化であるために、子どもたちもすっきりと納得できるであろう。

「りえ文字」をご存じですか。

『横書き書字による速書体の転移』というテーマで論文を書いたことがある。これは、昭和50年代に流行した、いわゆる「マンガ字」について書写の立場から分析・研究したものである。当時の女子中・高生を中心として流行ったため、現在は三十代前後の若い母親たちの書く文字となっている。

そして今の中・高生の多くが使用するのは、タレントの宮沢りえに端を発するという「長形ヘタウマ文字」。通称「りえ文字」である。これは、その命名からも窺えるように、一見したところどこがどう悪いと指摘することは難しく、うまい字のように感じる。しかし、正しいとされる文字とは似ても似つかない。「マンガ字」のように明らかに外形を崩すというよりは、正しいとされる文字の特徴を極端に突出させた形態といえるだろうか。どの部分も角張らせ、円運動というものが全くない。円運動で成り立つ平仮名でさえ、である。これは、現代の子どもたちが、文字を書くことができなくなっていることを示しているのではないか。文字を正しく書く力がないのに、受容しなければならない情報量はどんどん増加する。書字の必要に迫られた子どもたちは、この「長形ヘタウマ文字」に傾倒していくことになる。こうして見ると、書写教育で取り上げるべき問題点が明確になってきたことがわかるだろう。

文字の手書きは必要でしょうか。

手書き文字を支えているのはなんだろうか。「暖かみ」や「親しみやすさ」という雰囲気の問題だけだろうか。形態的な「美しさ」に関しては、既にワープロの文字に追いつかれ、追い越されている。それでは、手書き文字はもう必要ないのだろうか。これは「文字を書く」という問題への言及と関連する。

小学校に入ったばかりの子どもの大半は、平仮名あるいは漢字で自分の名前を書くことができる。子どもは、活字や周囲の大人の書く文字を真似ておぼえている。この場合、子どもは結果的に同じ形態になればいいのであって、筆順や画数は問題としていない。この現象は就学前の子どもだけでなく、現代社会の書字についても言えるのではないだろうか。しかし、現在使用される文字と伝統的なものでは、筆順や形態の異なるものがあり、伝統的なものを無視することはできない。両者をどのように関連付けていくかを考える必要がある。

また、書に対する自己教育力の育成についても、考えておきたい。現在は、評価を下すのは常に教師などの「他者」である。本来は、自分で評価することによって自分で納得してほしい。そのための評価基準を設けること、子ども自身が評価する力を身につけることが必要なのである。

現代は、情報化社会といわれる。それが教育という分野に与える影響は、どれほどのものであろうか。まず思い浮かぶのは、今まで使用していたペンとノートが、ワープロに変わるのではないかということであろう。しかし、情報化というのはそれだけのことではない。黒板も不要になり、さらには、家にいてもオンラインシステムなどで学習が可能となるのである。このように考えていくと、書写教育だけでなく、学校教育そのものが必要ないというところに行き着くのではないだろうか。

「文字を書く」ということは、一体どのような意味を持っているのでしょうか。

我々も小学生のときに、嫌というほど使用してきた漢字練習帳。一つの漢字について何十回と練習した幼い自分の姿は、今でもありありと目に浮かぶであろう。この練習は果たして本当に必要なものなのかと、疑問を抱いた人も少なくない筈である。確実に言えることは、目で見たものを頭に定着させるためには、複数回手で書く必要があるということである。つまり、文字の習得・学習には、手指の運動性が非常に密接に関係して

いるといえる。文字を反復練習させる際、教師の側に以上のような必要性・利点の把握がなければ、子どもも納得させることはできないであろう。

学校における書写教育とならんだ形で、社会に存在するのが書塾である。この書塾に所属する人口というのは、換言すれば「書道を支えている人口」であろう。ところがその実態は、親の言いなりで自分の意思とは無関係に通わされる子どもか、老後の楽しみのために通う大人が大半を占めているのである。つまり、本当に書道を支えるべき中間の年齢層が欠落してしまっている。このような社会背景の下に、書写教育あるいは学校教育の在り方を、見直す必要があるのではないだろうか。現在の教育では、言語に対する興味・関心や書の楽しみは、いつの間にか消えさってしまうことになりがちである。そこには、あるもの（教科書など）をそのまま教えればよいというような、教師の側の態度や考え方も関連しているのではないか。「字を書く」ということに立脚してその利点（価値・目的・メリット）を立ち上げ、子どもたちに提示していかなければ、書写にしても書道にしても生き残ることは難しいだろう。



私の筆記速度が先生のお話についていけなくて、かなり羅列的な記録となってしまいました…。もちろん筆記速度の問題だけでないことは、私自身がよく認識しているつもりですが。自慢できることじゃないですね。トホホ…。

さて、小竹先生の講演が終わったところで、この旅の目的の半分(?)が達成されました。残る半分は、もちろん奈良観光です！当然、みんなそろってGO！といきたかったのですが、小竹先生を講演後の「情報交換」なるものに取りられてしまい、まずは残る8人での東大寺散策となりました。

「鹿や、しか。一緒に写真とらな」

「餌売ってるで」

「餌持ったら追いかけてくるー」

…等々大騒ぎで東大寺入りした私たち。とりあえず、転校などでひたすらタイミングをはずして、今回初めてというもちゃんを中心に、「奈良の大仏さん」を見上げること数秒…。その大きさに改めて圧倒された瞬間でした。そして噂（最近のゼミで話題沸騰）の「大仏さんの背中にささっている棒」を探してウロウロキョロキョロ。大仏さんの絵葉書がナースッと買い漁ってから、境内を歩きまわり写真を撮りたくる、モロ観光客の私たちでした。ハッと気がつけば、先生と約束した時間が…！！大慌てでならま

ちセンターにUターンしたのでした。

小竹先生と合流して、商店街をあっちゃ見、こっちゃ見しながら駅に向かい、タクシー3台に分乗して、一路「奈良シティーホテル」へ。当初の予想よりも奈良市街から遠ざかっていくので、実は「一体どこへ連れて行かれるんだろう…」とちょっと心配してしまいました。ついてチェックインし、一休みして荷物整理をしたらおまちかねの夕御飯です。みんなでゾロゾロ食堂に行くと、びっくり仰天の豪華絢爛なお食事…。「なんなんだっこれは」と目を丸くしてしまいました。いろんな料理がこれでもかこれでもかと思ってくる中、きわめつけは「伊勢海老の塩焼き」。みんなで一匹かと思いきや、なんと一人につき縦半分ずつ食べるとおっしゃる。まさに「目を白黒させて」いただきました、ハイ。もちろんお味の方はバッチリ♥。約一名「だまされたと思って食べてごらん」とだまされて食べた甘えびに、泣きそうになっている者もありましたが。

食事の後はみんなでゴロゴロ…なわけありません。そう、これからが小竹ゼミの小竹ゼミたるところなのです。みんなでタクシーに飛び乗り（?）、颯爽と奈良市街に逆戻り。夜の興福寺五重の塔の美しかったこと…。そして私たちはゲーセンへ。はじめて見る小竹先生の芸術的なUFOキャッチャーさばき、ハンドルさばき、そしてプリクラ…。何もかもが、私たちを夢の世界へといざなうのでした。ｷﾀﾀﾞﾒﾀﾞﾒｲﾃﾞ…

ホテルに戻ると、女性陣は全員浴衣に着替えて「はい、ポーズ!」。小竹先生と梅本さんは…皆さんのご想像にお任せいたします……。みんな日頃の運動不足を物ともせず一日中歩きまわったので、その夜はぐっすりと眠れたことでしょう。

翌10日は、ホテルの前からバスに乗り、唐招提寺へと向かいました。小竹先生のお母様が大好きだったというこのお寺。その素朴な美しさに、私たちも思いっきり魅せられてしまいました。朝も早かったためかほとんど人もいなくて、私たちの独占状態で心ゆくまで堪能させていただきました。唐招提寺を出て、たらたらと歩いていくと「頑固一徹長屋」が見えてきます。墨作りの実演を見学し、いろいろな書道用品を物珍しげに眺めたところで、その先にある薬師寺に行くグループと、昨日泊まったホテル近くのSOGOに写楽展を観に行くグループで、別行動をとることになりました。私たちは小竹先生にガイドしていただいて、ゆっくりと薬師寺近辺を徘徊いたしました。そこでめぐりあったのは、白百合学園なる女子校の「しぶいセンセイ」…。私たちはのりちゃんの好みの把握をできずに、しばらく思い悩んだのでした。

お昼もそれぞれでとって、再び薬師寺に全員集合し、今度は法隆寺へ。

柿くえば

鐘の鳴るなり 法隆寺

あまり時間がないとのことで、宝物殿も夢殿もほとんどダッシュで駆け抜けることになりました。それでも、玉虫厨子や百済観音など素晴らしい展示物に、しばし目を奪われ、立ち止まってしまいました。突然風流人になった気分で、「もっとお寺めぐりをしたいー」と私たちに言わしめた奈良のお寺って偉大です。

もう日も暮れかかろうという中を、てくてくてくてくてくてくてく歩いて、とうとう奈良ともお別れです。大阪梅田でのりちゃんと別れ、私たちは高速バスに乗り込みました。…どっこいこれで話は終わりません。自宅に戻ると言って去って行ったのりちゃんは自宅玄関で、「ただいまー。じゃあいつてきまーすっ」と出てきて、私たちの乗ったバスに見事に復活！！うーん、早技だわ…。そしてとつぷりと日も暮れた頃、私たちは無事社へと辿り着いたのです。スケジュール盛り沢山、歩行距離も盛り沢山の充実した奈良旅行となりました。めでたしめでたし。



